

現代の意識と教育相談

橋 本 尚 子

1. 従来の教育相談が通用しにくくなってきていること

心理療法の学びの過程で、必ずと言っていいほど、「ロジャーズの三原則」がでてくる。ロジャーズ理論における治療者側の態度としての、受容（無条件の積極的関心）、共感的理解、純粋性（自己一致）も多くの者が学ぶ。河合(2009)は、このロジャーズ理論が日本に導入された当時、指導をしないというやり方が教育界では衝撃的だったと述べている。カウンセリングというと指導やアドバイスというイメージが強かった中で、来談者が中心であり、来談者が自ら答えを見出していくことを援助するという考え方は斬新だったことが想像される。「わが国におけるカウンセリングの急激な発展に、ロジャーズの果たしてきた役割は非常に大きいものがあったことは誰しもが認めるところであろう。現在、わが国においてカウンセリングを行っている人たちの(医学関係の方を除き)ほとんどがロジャーズの影響を受けていると言っても過言ではないだろう」(河合1970)と述べているように、当時、日本では広くロジャーズが受け入れられ、教育現場のみならず、カウンセリングと、受容・共感・また治療者の中立性というのは切り離せないイメージとして定着していったといえる。また、治療者がこのような態度をとることで、軽度であれば、来談者が自らよくなって行くという点や、受容や共感などの非言語的なあり方が日本人になじみやすいものであったことも、このような定着に意味を持ったと思われる。ロジャーズ派ではなくとも、このような治療者の態度は、カウンセリングの一般的あ

り方と考えられるようになっていった。

しかし、そもそもこのカウンセリングのあり方が成立するためには、当然のことながら、来談者が自ら悩みを語るということが前提になっている。来談者自らが、自己意識をもち、苦しみや悩みを自分で語るができるからこそ、治療者側の受容や共感が成立するのである。来談者側にそのような意識がなかったり、自分で悩みを語るができない場合には、そもそもこの受容や共感的理解に基づく言葉によるカウンセリングが成立しない。

そして現代では、自分で苦しみを語れない者が増えてきている。苦しみを感じにくい状態であれば、やはり苦しみや悩みは語れない。周囲はその人に問題があると感じていても、本人が問題をまったく感じていなければ、カウンセリングは非常に難しい。精神科医である野間「現代の人々は、苦悩を引き受けるべき「主体」が不明瞭で、周囲へと拡散している印象がある」(2012)と述べている。岩宮(2009)もスクールカウンセリングの事例から、「現代では従来のように葛藤や悩みを契機にして深く無意識に入っていくセラピーが難しい事例も増えてきている」と述べる。また武野(2010)も「しっかりとした自我を前提とした従来精神療法のシステムが通用しなくなってきている」と述べる。武野が言う精神療法が前提としていた「しっかりとした自我」とは、自分で自分を見つめることのできる能力、自己意識であり、本能と超自我の間を調整する役割である自我であり、現実を直視し、自分として現実に関わっていくために様々のことを調整していく能力のことであろう。それらが前提とできない状態になっているということである。これらの言葉からも、現代では苦悩することや葛藤を抱え内面化することが難しくなっている面があるといえる。

2. 自分の現在位置

養老孟司(2014)は、自分というのは、地図の上の現在位置が矢印によって示されるその矢印くらいのものではないかと述べる。つまり、全体の地

図が示されても、自分の今いる現在地がないと、役には立たない。全体の位置関係の中で、自分の位置づけがわかることが「自分」に気づくことではないかということである。「自分の現在地」という視点から見ると、現代は、この地上における自分の現在地がつかみにくい時代になっているのではないだろうか。地上における自分の現在地というのは、実体としてこの地上に生きていることが自明であった時代と比較すると、現代においては難しいことが想像される。インターネットの普及により簡単に空からの視点になったり、時空を超えたりが成立する現代においては、地に足のついた自分の現在地は自然発生的な自明のものではなく、獲得されなければならないものになるのではないか。そして自分の現在地、自分を定位させることが不明瞭であるならば、当然自分自身が不明瞭であり、自分を振り返ることも難しくなる。若者において、SNSを通して悩みを拡散させ、悩みや苦しみを自分の中であまり感じないようにしたり、心の傷が傷として認識されず、なかったことのようにしてしまうのは、地上における自分の現在地の不確かさのためなのかもしれない。ゲームやグーグルマップ、アニメや漫画の登場人物になりきるコスプレ、ネットやSNS上の人間関係など、異世界はたくさんあり、いくらでもこの現実から離れて逃げ込める世界はある。ある生徒は「ネットの中では理想の自分でいられる。現実のコンプレックスから離れて、好きな自分になることができる」と述べた。そのような中で、現実を実体のあるリアルなものとして体験することが、以前より弱まってきていることを感じさせる。異世界が色々あってそこに逃げ込み、埋没することのできる装置が多く用意されている中で、むしろ難しくなっているのは、現実と出会っていくことなのではないだろうか。最初に自分の現在地があって、色々な世界を知って行くという従来のあり方ではなく、ネットやゲーム、SNSなど色々な異世界からいかに出られるのか、いかにこの現実と出会えるのかが重要になってくるのかもしれない。そして現実の自分の現在地自体を、探さないといけない感じだろうか。

3. かすむ二項対立の世界と他者不在

従来の教育相談や心理療法が前提としていた意識のあり方には、この世とあの世、こちらと向こう、生と死、光と影、親と子、自分と他者、自分と世間、表と裏、身体と心など、様々な二項対立が成立していたといえる。だからそこに葛藤や悩みが生じたわけである。現代では、あまりその二項対立が明確な構造を持たなくなってきたように思われる。自分と他者といっても、ほとんど他人が認識されていなかったり、世間という意識も希薄になってきている。親子も、友達親子という言葉が示すように、親が大人として子どもに権威を示すことができず、例えば、子どもに嫌われたくないので注意ができないという親の声もある。生と死についても、死ばかりではなく、逆に生きていることが実感されにくくなっている面がある。現代では、そもそもこの世という縛り自体が不明瞭なものになってきている面があり、ことに若者においては、上で述べたようなグーグルマップやネットなどの使用により、現実を実体のあるものとして体験することが、以前よりも弱まってきていると感じさせる面がある。ユング派では大切にされる世界の神話も、あらゆるゲームに組み込まれてしまっている。

そのような世界観と、自分という定点、現在地自体が不明瞭であることはつながっているように思われる。自分という現在地が不明瞭であると、世界全体も不明瞭になる。そして、自分を振り返って語るということが難しくなってくる。カウンセリングに来ても自分の話ができない若者は、日常においては軽いノリと言葉で日常は過ごせるので問題はない。しかし、いざ自分の大切な話になると、話せない。こちらがかなり言葉を差し出して、やっとなし話ができるようになったり、中には全く自分から話せない者もいる。その場合、話せないことに対して、それがカウンセラーにどのような受け取られるかという意識がほとんどない場合も少なくない。

例えば、実際に筆者が担当した教育相談において、全く話を自分からしない生徒がいた。中2女子である。もちろん、緘黙症のような症状のために話ができないのではない。こちらは、思春期の体験ゆえの言葉になりに

くさか、あるいは私が何か嫌な感じを与えてしまったのか、など気をもみながら会っていた。全く話はしないが、カウンセリングに通っては来る。本人が話をしないので、仕方なく、こちらから質問したりする。ここで、何が好き？などの問いに自分の好きなことの話(ジャンプでも、ラインのスタンプのことでも何でもいい)をしてくれれば、カウンセリングは成立しやすい。その子どもの世界をこちらが理解する道筋になるからである。ところがその子は一向に話さない。好きなことの話が難しいのかと思い、何年何組？などの具体的な質問を試みる。しかし返事はないので、仕方なく、ゲームのように、こちらが、一組？二組？と聞いていき、本人が頷いたところが正解というゲームのようなやり取りがようやく成立するだけであった。そのようなやり取りで、数か月たったある日、意を決して聞いてみる。〈あのね、そんなに黙ってて、私がどう思うかとか、気にならない？〉「ならない」という答えであった。言葉が苦手なクライアントには、箱庭など非言語的心理療法をとという考えもあり、それにも誘ってみたが、この生徒にはそれも無理であった。〈ふつうは、そんなに黙っているのは、相手が嫌だとか話したくないととられるよ。あなたの場合は、そうではないんだね〉と返すとうなずく。数年にわたって会っていく中で、徐々に言葉がわずかずつ語られるようになっていった事例であった。

やはりこの事例で最も驚かされたのは、ずっとカウンセラーからの問いかけに対しても自分が黙り続けていて、カウンセラーがどう思うかが全く気にならないと言った本人の言葉である。反抗や、カウンセリングへの抵抗感、カウンセラーへの嫌悪感といった本人の何らかの感情に由来する沈黙であるならば、了解可能であるし、それなりに大切にすべきである。それは、カウンセラーの存在が認識されているものである。しかしここでは、全くカウンセラーが気持ちを持った他者として認識されていないのである。発達障害も疑われるが、やはりそこまで明確には発達障害ともとらえられない。ここまで極端ではないにしろ、カウンセラーに自分の話が届いているのか、カウンセラーはわかってくれているのか、などの意識が非常に薄

い者が少なくない印象がある。自分の世界に埋没していて、他者への意識が弱い印象である。それは同時に悩みの切実さからの距離でもあるように思える。あまりに苦しくて何とかしてほしい、そのために誰かに聞いてほしいという感情自体が薄く、「困ってはいるが、悩んではいない」というような状態の人が増えてきているように思う。

このように、自分を振り返る自分の意識の弱さ、つまり自分の現在位置の認識が弱いことと、自分に対峙する人を認識することの弱さはつながっているように思われる。そのような中であって、従来のカウンセリングの基本的なあり方が通用しなくなってきている。黙って聞いていたのでは、いつまでも何も話されなかったり、来なくなってしまったり、あるいはカウンセラーの理解に関わりなく、あまりにも一方的な話が続く場合もある。そもそも、黙って聞くためには、相手がこちらに向かって話をするということが前提としてあるはずだが、それ自体が成立しにくくなっている。かと言って箱庭など非言語的なものと表現できるというのでもない。このような中で、従来の教育相談のやり方が通用せず、手探りで新たなあり方を探っていくことの必要性があると言える。

4. 発達課題と現代における変化

広沢(2015)は発達課題について以下のように述べている。「発達課題(developmental task)とは、「人間が健全で幸福な発達をとげるために各発達段階で達成しておかなければならない課題」である。ハヴィガーストは、発達課題を自己と社会に対する健全な適応にとっての必須の学習として捉えた。一中略—このような実践理論は、フロイト以来の心理学の集大成の一つに位置づけられよう。したがって、多分に先に述べた近代西欧型自己を念頭に置いたときに、理解しやすい具体的な自己の確立方法を示したものと見える。一中略—いずれにしてもこのような教育を受けてきた者ならば、まずは近代西欧型自己を、人間としてのこころの標準とみやすくなる可能性があるかもしれない。」我々が心理学の教科書でいまだ学び続けて

いるのはこのような発達課題である。しかし例えば、思春期青年期にかけて、親への反抗が生じ、それが親との距離感を実現し、親以外の重要な他者を求める気持ちへとつながり自立への道を歩み始めるという図式は、果たして現代の若者に合うのだろうか。親への反抗について、授業内で学生に作文を書かせたことがあるが、反抗期の経験があるのは、半数程度であった。逆に親への尊敬や、親が自分を支えてくれる重要な人物として書かれていることも少なくはなかった。戦前においては、日本でも親への反抗などはなく、親は尊敬すべきものであった。それがいつしか自立＝反抗という形で思春期・青年期の発達課題のような図式になったが、現在においてはまた変化してきているのかもしれない。これも反抗もできない未熟な自我とみなすのか、新たなタイプの意識の表れととらえるのか、意見が分かれるだろう。

しかし、様々な面での若者の意識の変化にともなって、教育相談に関わる者の認識自体も変化する必要があるのではないか。

5. 時代の病, 時代のころ

ギーゲリッヒ(2001)は以下のように述べている「もしあることにある程度献身的に十分長く没頭するならば、この対象はしだいに自分のものになってきて、自分の心に入ってきて、自分の考え方や経験の仕方を示すようになる。人によって作られたもの、我々の使う道具、われわれの周りのものというのは、時間とともにわれわれの意識を同化して、最初は意識の対象や内容にすぎないと思われていたものが、結局のところは意識そのものの論理的な形式や構造であるということがわかるのである。－中略－つまり、これまで内容であったものが、自分がものを見る見方の枠組みになったのである。」これはテレビの機能についての論文からの引用であるが、現代のスマホ、SNSなどあらゆるものに通じるであろう。それらの機械との共生が、逆に私たちの意識自体を変革し、作り上げていくのである。これは個人的にスマホを使用するかどうかという問題ではなく、時代その

ものの意識と言え、集合的意識と言える。

また田中(2010)は、現代の教育界や医学界を賑わす言葉でもある「発達障害」の増加について、心理学的に人間存在の「質」の変化、こころ、あるいは、意識のあり方の変化が深く関わっているのだらうと述べる。具体的には「大都市の集合住宅において隣人同士がお互いの名字さえも知らない匿名性の中で生活している状況や、一昔前まではSFの世界での「おはなし」だったセックスレスや出産能力の喪失による子どもの生まれない世界、さらには、個々人がPCのモニターにだけ向き合って、それを通してだけ世界とヴァーチャルな接続が可能なインターネット社会、これらにおいてはウィングが掲げた「自閉症の三つ組」のすべてが見事に実現している。このように考えると、現代社会それ自体が、そして、世界におけるわれわれの存在様式それ自体が、発達障害化しているときえ言えるのである。」としている。

畑中(2016)はロールシャッハテストの結果の分析から、発達障害に特異的に多い「不確定反応」が大学生群においても一定数見られたことをさらに絞り込み、2003年と2013年の大学生の反応を比較した結果、2013年の大学生には、有意に多く不確定反応を示すことが明らかになったことを述べている。大きな混乱を示し、「確定しようとしてもできない」場合が多い発達障害群の不確定反応と比べ、大学生の不確定反応は、そもそも反応を確定しようとしておらず、反応がはっきりしないことに対して躊躇や疑問、葛藤が生じにくいようであり、検査状況に置いて、反応を確定するための主体を立ち上げようとしないと言えると述べる。

状況は理解していても、それに対して自分なりの反応をしないというのは、半ば意識して現実に直面しないあり方でもあるといえる。自分なりの反応をすると、そこに責任が伴い、自分というものを自分で認識することにもつながる。そこをあえて留保することで、責任の生じないポジションに自分を置くことができる。ここでもやはり、リアリティーに触れることを避ける一つの形があるのではないだろうか。これは半ば意識されたもの

でもあり、しかしそのような状態が当然のものになれば、実感を持った自分の体験は積み重なりにくくなり、その結果として自分がどういう人間であるのかなど、自分についての認識もはっきりとしないままであることが想像される。自分の悩みや苦しみを語ることが難しい人が増えているのは、そのような面もあるためであろう。発達障害や非定型発達ではなくとも、主体を発動しないあり方というのが現代では増えてきているのかもしれない。

実際に多数のキャラを生きる若者(多重人格というわけではない)の教育相談を担当すると、そのような振る舞い自体が形式化し、逆に意識として定着していることが見えてくる。つまり、最初は一時的に苦悩や現実を避けるために色々なキャラを生きていたのだとしても、その態度を続けること自体により、苦悩をより感じにくい意識が創りだされていく側面があるということである。苦悩があつて、それを避けるためというよりも、自分が主体として関わることへの留保(その背後には恐怖があるのかもしれない)が感じられる。本質があつて演じていて、いつでも本質に戻れるというのではなく、演じすぎて本質自体がわからなくなって来談する場合もある。

6. 社会構造と定型発達・非定型発達

河合(2016)は「一見すると発達障害のようであるけれども、それとは区別したほうがよいと思われる人たちが増えているようである。それではそのように見立てられた人たちが、統合失調症、人格障害、神経症などの従来のカテゴリーに該当するかというと、それはそれで疑問が残る。つまり通常の神経症のような心因や、問題の発生の心理的メカニズムを想定することは難しく、何らかの発達上の脆弱さのようなものが感じられるのである。」と非定型発達について述べ、それらに対しての必要なアプローチを検討する中で、発達障害の増加を社会構造の点からも捉えており、「固定した社会構造や要請との間に葛藤が生じにくく、社会が強制的でなくなり、自由度が増したという喜ばしい反面、社会からの強制がないために、定型

的な発達からずれた非定型的な発達の問題を抱えた人が増えてきていると考えられる」と述べる。これは視点を変えると、年齢に見合った発達課題を年齢相応に超えることを社会から求められる中で培われた社会との接点や、その強制力と自分であることをめぐっての個人の葛藤などが消失したということである。そのため、自由度の高さがある反面、個人が自分自身であることを意識したり苦悩したりする力も弱くなっており、主体であるということが意識されないまま成長がすすんでいく側面があるということである。強制力は人間に苦しみも与えたけれども、それにより、「社会の強制力になじめない自分」という自分の意識を発達させることができるといことで、逆に人間を成長させる側面も持っていたのであろう。又、強制力があることで、いやでも社会との接点を持たざるをえないというのは、世界のリアリティーにも触れやすかったと思われる。社会からの強制力が弱まったことにより、自分とは絶対的に異なる規範や他者と出会うことも減り、リアリティーに触れる機会が少ないままに成長していくことによって、自由は増えた分、新たな苦しみもまた生じてきているのではないだろうか。

7. 今後の教育相談のあり方について

教育相談などでは、発達障害ではないが、保護されすぎて、経験不足により社会との接点をうまく持てない子どもなど、子どもを保護する方向は強いけれども、逆に保護から出て社会に出て行くことを想定した厳しさを持って子どもを後押しできる親や家族の力自体も弱くなってきている事例にも出会う。将来的に親なしでも生きられるようになることを願っての適切なしつけが難しく、監視が過剰であったり、あるいは保護しすぎかという極端な形が増えてきている。また、子どもを傷つけることや、子どもから嫌われることを恐れて、きちんと向き合うことや、親子で話し合ったりぶつかったりすることを避ける傾向も、よく見られる。おそらく、社会からの強制力のない現代にあって、しつけの基準自体を親自身やそれぞれの

家族が創りださねばならない面があり、それに戸惑い圧倒され疲弊している母親の様子も感じられる。また、例えば不登校でも、今はフリースクールなど多様な受け皿があり、昔のように学校へ行くことが絶対的に正しいという規範は薄まりつつある。しかしそれで自由になる反面、社会的規範の希薄化により従うべきしつけの基準も不明瞭となり、かといって新たに自分なりのしつけの基準を創るほどにはエネルギーもなく、何となく他者の意見や、ネットの情報に流されてどうしていいかわからない母親にも出会う。従来は自然になされていたものが、自然にそれがなされないことも増えてきている。

よって教育相談においても、生徒の気持ちを受け止めるだけではない動きが必要な場合が増えているようにも思う。十分な関係性に支えられることが不可欠ではあるが、時には親や家族、教師がしにくくなっている「背中を押す」動きをカウンセラーがすることが意味を持つ場合もある。また、SNSの普及により、家族間、友達間で生身の人間として直接会話をすることが減ってきている。このことにより、教育相談において、カウンセラーが「目の前の他者の話にしっかりと耳を傾ける」ことの意味合いも以前とは違うものになってきていると言える。その語られる内容ではなく、「まず耳を傾けることそのもの」が意味を持つケースが増えてきているということである。直接の会話の体験が少ないということは、家族や大事な人にきちんと聞いてもらった体験自体もまた少ないからである。このことは、従来のように、既に言葉を話すことができる者としてその語られる内容に焦点を当てて生徒の話聞くというよりも、言葉や自己意識を生み出させ発生させる関わりがセラピスト側に必要なことを意味する。そのためには、母親が赤ん坊を見つめ、語りかけることで、赤ん坊が言葉を学び、自分であることを学んでいくのに似たプロセスが必要となってくる。エネルギーと時間が必要である。また、現実との接点を持つこと自体が教育的・治療的意味を持つ場合などは、世界へと押し出していくために、従来のカウンセリングではあまりしないとされていた、アドヴァイスや具体的

な指示が意味を持つ場合もあるだろう(橋本2011)。従来の知見を踏まえ、かつ新たなやり方も模索していく試行錯誤が必要である。時代による影響を受けることで私たち自身の意識のあり方が変化してきている。それらの意識の変化を捉え、それらにあった教育相談のあり方を考える必要が生じてきている。

河合(同書)は、発達障害、そして非定型発達のどちらの場合にも、セラピストの個性や主体の関与が非常に重要であると述べている。これは従来の中立的で白紙であるカウンセラーが治療的に作用したのとは大きく異なる点であると言える。生身の人間として、気持ちを持って生きている人間としての関わりが従来以上に意味を持つのであろう。教育相談においても、これらの関わりは今後重要になってくるのではないだろうか。

参考文献

- ギーゲリッヒ, W:「テレビの機能と魂の苦境」『神話と意識』(河合俊雄訳), pp106-130, 2001
- 橋本尚子:「ある摂食障害の事例に見られる現代の意識と心理療法の課題」『箱庭療法学研究』第24巻1号, pp5-18, 2011
- 畑中千紘:「非定型化する若者世代のこころ—現代の対人恐怖とアグレッションのかたち」河合俊雄・田中康裕編『発達の非定型化と心理療法』創元社, pp156-179, 2016
- 広沢正孝:『学生相談室からみた「こころの構造」2015』岩崎学術出版社, 2015
- 岩宮恵子:『フツーの子の思春期』岩波書店, 2009
- 河合隼雄:『カウンセリングと人間性』創元社, 1975
- 河合隼雄:『心理療法序説』岩波現代文庫, 2009
- 河合俊雄:「発達障害の増加と発達の非定型化」河合俊雄・田中康裕編『発達の非定型化と心理療法』創元社, pp4-24, 2016
- 野間俊一:『身体の時間』筑摩書房, 2012
- 武野俊哉:「ユング心理学を診療に生かす」『臨床精神医学』39(1), 51-58, 2010
- 田中康裕:「発達障害と現代の心理療法—「自己の無効化」による「治療でない治療」としての自己展開」河合俊雄編『発達障害への心理療法的アプローチ』創元社, pp180-203, 2010
- 養老孟司:『「自分」の壁』新潮新書, 2014